田舎に住む少女二人を襲う、終わらない監禁陵辱の日々。
田舎っ娘陵辱
待ったなし！
ひらスリ

都会から離れに離れた田舎で見つけた二人の少女。
それは、車の中から見るどんな大自然よりもまぶしく見えた。
あてもない中年の一人旅。
性欲を発散する相手もいない自分の脳裏に、ある考えが浮かんできた。
彼女たちを汚したい。
いけないことだとはわかっているが、一度考え出すと止まらない。
気がつくと、車をUターンさせていた。
彼女たちの泣き顔を脳裏に浮かべ、股間を膨らませながら……。

「うぅ……こわいです、せ、せんぱい……」
「だ、だいじょうぶだよほ○る、そ、そんな泣かないでよ。わたしも怖くなってきちゃうじゃん……」
仲良く笑顔で歩いている姿があまりに無防備だったので、人気のない廃屋に連れ込むのは簡単だった。監禁である。
「えっと……こんなところに連れてきて、何……するの」
そんなわかりきったことを。こんなに可愛い年頃の少女がいたら、おじさんは悪戯するに決まってるじゃないか。

「そ……そんな、いや、嫌です、絶対……」
「……け、警察とか、よ、呼びますよ」
そんなもの、くるわけないよ。
この廃屋まで車で移動する間、交番、パトカーはもちろん。
他の車でさえ目に入らなかったんだからね。
「そ、そんな……そんなこと」
「……う、うぇえ……」

じゃあ、まずはおっきい娘から楽しませてもらおうかな。
小さい娘を先輩と呼んでいたことから、こっちが年下のようだが。

「ほ、ほ○る！　ちょ、ちょっと、ほ○るをどこに連れていくの！？」

……小さい方はまだ結構元気があるみたいだ。
あんまりうるさいと、おじさんも乱暴したくなっちゃうけどなぁ。
少し凄むと、先輩と呼ばれた少女はおとなしくなる。

「う……うぅ」

「あ、あの……ひ、ひどいことは、しないで、ください……」

大丈夫、最初は痛くて気持ち悪いかもしれないけど、
すぐに自分から求めるようになるから。

「うぅ……」
さっきから目の前のモノを見てうなっている。それはそうだろう。
女の子が中年のおち〇ぽを、見慣れている方がおかしい。
「これを……こんなのを、舐めなくちゃ、いけないんですか」
もちろん。そのためにその可愛いお顔の前に差し出しているのだから。
「なんで……わたしがこんなこと……」

「れろ……んんっ……」
熱い息で、すでにぱんぱんになっていたおち○ぽだったが、
少しざらついた舌を這わせられたことで、我慢汁までがあふれてくる。
「うぅ……く、臭い……よ」
未経験のコにはちょっときつい匂いかもしれないけど、
すぐに好きになるからね。女の子はそうやって大人になっていくんだ。
「……んっ、おぇ……れろ」

んん、はぁ……気持ちいいな。
ほ○るちゃん、ほら、こ、こっち向いて……。
「んぅ？　は、はい……」
ほら、僕の目を見て、しっかり……、
うん、いいよ！　その嫌そうな顔と、涙目が……。
「はぁ……、はぁ……気持ち、悪い、よぅ」
はぁ、はぁ……っ！！　う、出る、駄目だ。
もう、我慢……できないっっ！！

ドビュルルル、ビビュッ……

「う……！！　うぅうぅぅ！　あ、熱い」

はぁっ……はぁ……。ほ〇るちゃんの顔、汚れちゃったねぇ。
汚れた顔も、すごく、可愛いよ……。

「き、汚い……！　です！　嫌ぁ……」

ほら、口元についたのはしっかり舐めとって……？
こぼすのは、凄くもったいないんだからね。

「ふぇ……うぇ、そんなの、口に入れないで、ください」

全く、わがままだな。ほら、次は服を脱いで？
壁に手をついて……おしりをこっちに向けるんだよ。

「うあっ……！　な、なんですか、あっ、さ、触らないでっ……！」
……！　これは……予想以上に胸の発育が進んでいるなぁ！
とても○学生とは思えない。大きいが張りもあって、素晴らしい。
「ん……んんっ！　やめ、やめ……。えっ……！？　そんな、嫌です。そこは……」
先ほど射精したばかりだが、おち○ぽをおま○こにあてがう。
もちろん、ほ○るちゃんのはじめてを奪うためだ。
「い、嫌ぁ……やです……誰か、たすけてぇ」

さぁ、いくよ？　見た目に違わぬ、大人の女性にしてあげるからね。
おじさんは、さっきから準備万端なんだ……。
「う……うぐ……んんんん、うぅぅ」
ヌプ……ズブ、ズブブブブブ
「いっ……！　ったぁ……！！　いだい、ですぅ……」
やっぱり初物はきつい……でも、無理矢理こじあけていく感じが癖になりそうだ。
「あっ、あが……いた、い……いだいんです……本当に」
よし、入ったね。ふぅ……おじさん、暴発しないようにするので精一杯だよ。

ヌプッヌプッズチュッズチュッ

「!? うぅ、やめ、やめてください……! 痛いです……そ、そんな、動かないで……!!」

ふっ! ふぅうっ……!! いいよ! ほ○るちゃんっ。

少しずつ、少しずつ、なじませていこうね。我慢……して。

「お腹が、お腹が……気持ち悪い……よぅ。……せんぱぁい、ママぁ……」

田舎道から大きく離れた廃屋に、助けなんてくるわけがない。

……そろそろ、いいかな。もちろん、中出しだ。

びゅ、ビュルルル、ビュビュビュ

「っっっ――――　うぁっ――――　熱いっ……え……？　何か、出て……これって、その……」

どんなものかは知っているのだろうか。

……理解していそうな気がする。ほ〇るちゃん、賢そうだから。

「嘘……抜いてください……――　これ……これ……――

赤ちゃんできちゃう、のですよねっ……――　い……や」

お、やっぱり知っていたようだ。田舎でもきちんと性教育は行われているようだ。

そうだよ。おじさんとほ〇るちゃんの子が、できているかもしれないねぇ。

「そ……そんな……ひどい、ひどいです……。

こんなことして、楽しいんですか……いい加減に、してください……」

泣きじゃくるほ〇るちゃんの胸をまさぐりながら、

中出しした後のおま〇こを、しつこく、ゆったりと楽しむことにした。

……一度やってみたかったことを、やってみる。
未成熟な体がコンプレックスの女の子に、やってみたかった。

「こ、これで、いいの？　言うこと聞くから、怖いこと、しないでください……」

大人の男に免疫がないのだろうか、びくびくしていて、
こっちの言うことはなんでも聞いてくれそうだ。

「私のおっぱい……、みら、みられ、ちゃった」

薄い胸にくっついたぷりぷりした乳首が震えている。
緊張の為かほのかに汗もかいてきており、非常にえっちである。

「おじさん……え、何、何するの？」

ニチ……ぷに……

「ひっ……！！　な、なに、くっつけてるの！？」

お、少し驚いた。生意気にも抗議しているようだ。
こんな魅力的なちっさなおっぱい。おじさんがほっとくわけがないだろう？

「な、なんで……い、いた……そんなに、強く、こすりつけないで」

あんまりゆっくりしすぎても快感が薄れてしまうだけだ。
そろそろおじさんも気持ちよくなりたい。

「……ひっ……汚いっ！　ぬ、ぬるぬるしたのが……」

我慢汁が胸に垂れて可愛らしい。
こんなに小さいカラダしてる癖に、随分エッチな絵面である。

「うぅ……なんで……なんで……。ふぇ、やめてよ……」
おぉ……泣かせててしまった。まぁ、当たり前か。
こんな所に閉じ込められておじさんの相手など、心底嫌だろう。
「ほんとなら……もう、家に帰って、ご飯食べたり、お風呂入ったりしてる、頃なのにぃ…」
お風呂か……、そうだね。おじさんも、こ〇りちゃんと一緒に、
仲良く湯船に浸かりたいかな……なんてね。
「……絶対……嫌です……」

よし、そろそろいいかな。こ○りちゃん……おじさん、出すからね！
びゅびゅ、ビュルッ

「うぁっ！！　あん、私の、むねぇ……」

こ○りちゃんのちっぱい。汚れちゃったね。
白いローションを塗ったみたいで、テカテカだよ。

「うぇ……何、このニオイ……くさいよぉ……」

そんなこと言わないでよ。……よし、それじゃあ次は、
その可愛いお口に、おじさんのニオイと味を覚えさせてあげるとしよう。

「……！！　んぅ！　んぐぅ！」
い、痛。こ○りちゃん、いくらびっくりしたからって、おじさんのおち○ぽに歯を立てちゃだめだよ。
「んー、んんー！！」
嫌悪感より驚きの方が勝っているようだ。
顔をはげしく揺らしているが、頭をつかんで離さないようにする。
「う、うぶぅ……はぁ、はぁ……はぁ、はぁ。なんで、こんなの、口に……」
こ○りちゃんの小さいお口に包まれながら、生暖かい吐息を強く感じる。

「なんで、ごんな……きたないこと、するの!? くさいです……ぬ、抜いて……」
ジュプ、ジュププ、ズブッ
陰毛のあたりを目にしながら、嫌がる顔をしはじめたので、
舌におち〇ぽを押し付けるように、腰を入れていく。
「んんっ! おえ! やめ、やめてぇぇ……」
ほ〇るちゃんの中にも入ったことのあるおち〇ぽだよ。
そんなに嫌がらないで……よし、そろそろ終わりにしてあげよう。
「んぅ……ひどい……ほ、ほ〇るぅ。早く、抜いて、終わらせてください……」

びゅる、ビュビュビュビュッ
「んんっ!? んんんん~!!」
深く深く口の奥へおち○ぽを突っ込み、こ○りちゃんの喉奥へといっきに射精した。
「んぶ……んぐぅ……ぶぅえ……」
気持ちよすぎて一瞬視界が真っ白になってしまった。
しかしまだ離さない。最後の一滴が出るまで、口からは離さない。
「……んぐ……んく、の、のんじゃった……。
私、こんなきたないの……のんじゃった」
ひどく放心状態のようだ。今日はこの辺にしておいてあげようかな。

この前は勢いに任せてバックでいたしてしまったので、、今回は体をじっくり見せてもらう。
○学生のくせにぷるぷる震えるおっぱいが絶景である。
「んっ……んぅ……あん」
それにしても○学生のおま○こは最高だ。締め付けもすごくて……。
おや、ほ○るちゃんもちょっと気持ちよくなってきちゃったかな。
「ん……そんなこと、あるわけ、ないです……！　はやく、終わらせてください……」
最初に比べたら随分素直になったものだ。
う～ん、でもなんかこう、従順すぎるとつまらないんだよなぁ。
こ○りちゃんみたいに、すごく嫌がってくれると楽しいんだけど。

「……！　センパイに、もうひどいこと……しないでください」
お、大好きなセンパイがエッチなことされるのも、嫌なんだねぇ。
怒った顔もツリ目に似合って可愛い。おじさん、楽しくなってきちゃった。
ジュプ、スプっ！　スプップッスプップッ
「んっ！　私は、私は大丈夫ですから……センパイには、センパイにはぁ……」
大丈夫なんだね、ほ〇るちゃん、それならこっちも遠慮なく、
中に思いっきり出させてもらうね。ほら、いくよ……。

ビュルルル、ビュルル

「あーーっ!! あぁぁ!! 私の中に、いっぱい、いっぱい、出てます……うぅ、白いのがぁ……」

すごい勢いでほ〇るちゃんのおま〇こが白濁液でいっぱいになってしまった。我ながらとんでもない量だ。妊娠してもおかしくはないだろう。

「うぅぅぅ!! お腹、気持ち悪い、ですっ!! 嫌だよ……あぁぁ、はぁ、はぁ、ふぅ……ふぅ」

あ〜、気持ちいい。出し切ってしぼんでしまったが、しばらく余韻を楽しむ。泣き顔をじっくり見るのも、いいものである。

「うぅ……終わったなら、終わったなら早く、離してくださいぃ……。センパイ、会いたいよぉ」

よし、じゃあ代わりにおじさんが会ってきてあげよう。ほ〇るちゃんの愛液がついたおち〇ぽで、こ〇りちゃんの膣内を感じよう。

……ひとん

さぁ、こ○りちゃん……大人の女性になろうか。
おじさんが、ゆっくり、しっかり教えてあげるからね。

「え、嫌です……いやだ……やめて……やめてやめて！」

ほ○るちゃんは、もうすでにおじさんと一緒に大人になったよ？
ほら、こ○りちゃんも先輩らしいところ、見せないと……。

「ほ、ほ○るにそんな……ひどいよ……。」
うぅ……怖いよ……私、大人になんかならなくていい……。」

まぁまぁそんなこと言わずに……。
すぐに自分から求めるようになるからね……。

ニチャ、みちっ……ヌプププ、プツ……ズブブブ
「――――――！　んー！　んうううう――！」
痛くて声も出ないようだ。足のつけねが少しこわばっていて可愛らしい。
……口を大きく開けて、痛みに耐えているのかな。
「あっ……が……んう……い、いだ……いよ」
しかしなんてせまいおま○こなんだ。
本当にほ○るちゃんの先輩なのだろうか。
きつすぎて、こっちも少し痛いくらいだ。
「ぬい……て……たす、けて、くだ、さい」

……ふぅ、ここがこ〇りちゃんの、一番奥かな。
こつんと行き止まりになったような感じ、子宮口だろうか。
「……んっ……んん……」
よし、それじゃあ、動きはじめるとするか。
子宮口にぶつけるようにして、ピストンを繰り返していく。
「うっ！！　いだ、い……！　やめてっ、やめてぇぇ」
悲鳴と泣き顔が快感のアクセントになる。
こんな刺激的で気持ちのいいオナホール、人生ではじめてだ。
「なんで、なんでこんなことぉ……私が、私たちが
何したって、言うんですかぁ……」

君たちくらいの女の子はね。道で歩いているのを見てるだけで、おじさんたちは汚したくなっちゃうもんなの。こうやって、ね！

びゅ……ビュルルルっ！　びゅびゅ

「ひぃぃ！！　あぁぁ！　熱いよ。嫌ぁ。中に、中に出さないでよぅ……！！　やだ……気持ち悪い！　です……」

こ○りちゃんの子宮口におち○ぽをキスさせるように押し付ける。白く濁った精液を直接お腹の中に流し込む感覚、たまらない。

「あ、あ、あの、これって……赤ちゃん、できちゃうんじゃ……」

そうだよ。おじさんと一緒に可愛い赤ちゃん、作ろうね……。

「うぇ……ぁあ……こま、こまります……そんなの……や」

「……んぅ、で、できません、こんなの、おかしいです」
文化祭のときにつけていたらしいので、ネコ耳を買ってきた。
すごくほ〇るちゃんに似合ってて、可愛い。
「で、出ませんってば……そんな、お、おしっこなんて」
君は今可愛いネコなんだから、こうやっておしっこしないとダメだろ。
ほら、もっとご主人様にしっかり見えるようにして……。
「こんなの……絶対、おかしい、よぅ……」

「ん……んうう、っはぁ」
う～ん、やっぱり人に見られてると出にくいのだろうか。
おじさんも実際トイレで隣に人がいると出にくいし。
「はぁ……はぁ、んっ、んっ……」
まぁ、そんなレベルの話ではないだろうが……。
顔を真っ赤にして、一生懸命おしっこしようとしている姿が可愛らしい。
「あ、ん、やっと、出そう……、あ、あ……」

チョロ、チョロロ……

「あっ……あ、出た、ぁん、出て、る……」

黄金水色の液体がおま〇こからあふれ出してくる。
最初はゆっくり少しずつ、だったが、段々勢いを増してきた。

「あっ……え、えっ、なんで、なんで？　と、止まり、ません」

少し酸っぱい香りが漂いはじめた。全く不快ではないので、
思い切り息を吸い込み、ほ〇るちゃんを鼻腔で感じる。

「あぁ、ふぅう、はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……」

「やっと……とま、とま、り、ましたぁ……」
顔は赤らんだままだが、恍惚とした表情を浮かべている。
望んではいないだろうが、気持ちよくなってしまったのだろう。
「あ……はぁ、ひどい、です、こんな、恥ずかしいこと、させて」
そんな顔をしておいて何を言っているのか、
ほ〇るちゃんも、なんだかんだで感じてたんでしょ。クセになるかも。
「そ、そんなわけ、ありません。こんな、こんなこと！
二度としたく、ないです……」
じゃあ、本番といこうかな。こんな発情した子猫ちゃんには、
おじさんがオシオキしてあげないといけないからなぁ。

「あぁ……うぅ、もう、開放してください。家に帰して……ママに、みんなに会いたいよ……」
ほ〇るちゃんもこれ、好きになってきたでしょ。おじさんもおしっこするほ〇るちゃんみて、興奮しちゃってさ。
「やです……！　嫌です……おち〇ちん、嫌ですぅ」
お、よく言えました……ほら、はじめてでもないんだから。そんなにイヤイヤしないっ。おとなしくして……。
「うぅ、そんな汚いの、入れないで……気持ち悪い」

ヌプン、ヌルルル
「うううぅ!! は、はいってきてる……! また私の中にぃ」
ふふ、ほ〇るんの中、ヒクヒクいってるよ。
そんなにおじさんのおち〇ぽが待ち遠しかったんだね。
「違います……! そんなわけ、ないです……」
ネコ耳と首輪がこんなに似合う女の子も珍しい。
おじさんも文化祭とやらに言ってみたかったな。
「はぁ……はぁ、もう……! 早く、終わらせてください」

お、ちょっと生意気な口をきくようになったね。
結構結構、元気があってなにより。犯し甲斐がある。
ヌプッ、ジュプッジュプッジュプッ！

「うっ……あっ！　ぁん！　あん!!　は、激しい……です」
ほ〇るちゃんが早く終わらせろって言ったんじゃないか……。
それなりに勢いよく、させてもらうよっ……！

「うぅぅ、奥にっ、奥にきてますぅぅぅ!!　いやぁ、
私の大事なところ……壊れちゃいます……よ」
はぁ……はぁ……腰に打ち付けるようにして、
おち〇ぽを出し入れしていく。もう、そろそろ限界だ。

びゅびゅ、ビュルルル、ビュルルルルッ！
「あ～～～っ！！！！！！！！また、またぁ……。出てますよぉ、私の中に、いっぱい……」
生意気なカラダしたネコ耳娘に思いっきり射精する。
う～ん、必死に体を離そうと身をよじるのもたまらない。
「んぅ……やだ……やだ……ひっく……もう、嫌」
ほ〇るちゃんもこ〇りちゃんも、まだまだおじさんと一緒だよ。
これからもずっと、楽しもうね。ほ〇るん……。
「……その呼び方……止めてください……。私もうこんなこと、したくないです……」

「あの……これって、そ、その……」
せっかく田舎にきたんだから、外も歩くか、ということで、
こ〇りちゃんとたまには散歩することにした。
「だ……だれか来たら……！　もし、きたら……」
誰もきやしないって、こんな田舎の僻地に、人なんか歩いてるもんか。
裸のこ〇りちゃんは、いつもよりびくびくしているようだ。
「で、でも……でもぉ……」

「は、恥ずかしい……ムリ、です。うっ……うっうっ、ふぇ……」
あ、ちょっと、こんなところで泣き出さないくれよ。
大きい声を出されると、いくら人がいなくても、ちょっと焦る。
「こんな、私、犬みたいに……おかしいよ……、
都会の人って、頭がヘンなんじゃないですか……」
体をぷるぷる震わせて、泣きじゃくっている。
う～ん、さすがにちょっとかわいそうだったかな。
「もう、満足しましたか……？　服、着させてください」

そうだなぁ……じゃあ、こうしよう。
おじさん、こ〇りちゃんに着て欲しい服を買ってきたんだよね。
「私に、着てほしい……服？」
ちょっと着るには早い季節かもしれないけどね。
でも、水着姿のこ〇りちゃん、見たいんだよ。
「なんで……み、みず、ぎ……？　うう……でも、裸よりは……。」
よし、お願いしてみると急にわくわくしてきた。
さぁ、早く戻ろう。股間のモノも準備万端である。

さて、おじさんが買ってきた水着、着心地はどうかな。
すごく、いい眺めだよ。予想通り、似合ってる。

「うぅ、水着って、なんでこれなのぉ」

学校指定で使われているスクール水着である。
こ〇りちゃんの幼児体型にはぴったりだ。ほら、早くお尻を向けて。

「こんなとこでスクール水着って……何がしたいんですか……」

スクール水着に興奮するおじさんも多いんだよ。
はぁ、はぁ……こ〇りちゃん、とってもいい眺めだよ。

グイッ、ググ……ズプ……ヌププ……

「んぐ……んぁっ!! あっあっあっあっ……」

青くサラサラとした布地を乱暴に引っ張り、しっかり、ゆっくりと挿入していく。

「えぅ……いい……嫌だ……もう、嫌です……ぅ」

ぬぷ、ヌプププププ

「あっ……か、くふぅ……うえ……」

入ったね。やっと全部入ったね。じゃあおじさん、動くよ。

そぶ……グチュ、ぐちゅッグチュ

「あっ……あぁー　……あぅぅ!!!　いた、い、です」

……窮屈なしめつけがおち○ぽを刺激してくる。
スクール水着がじっとり汗で湿ってくるのが、たまらない。

「う……うぅっ!!　うぅぅぅ!」

バックははじめてのはずだから、結構お腹にクるだろう。
いつもより苦しそうだ。こまりちゃんが話す言葉が、全く意味を成していない。

「んぅー　ぐぅ……うえ……んん」

ビュルルル、ビュルル、ビュプ……

「――――――――！　……！？」

……くっ、はぁっ！！

予告もなしに射精してしまった。ちょっと刺激が、強すぎた。

「……あ、あぁあー　気持ち、悪い……よ」

こ○りちゃんの赤ちゃんの部屋は今、中年の精液で一杯になっているだろう。

まだ射精は止まらない。なんて気持ちのいいおま○こだろうか。

「……んぅ……ん……」

もう抵抗する気もなくしたようだ……。くたっと力が抜けている。

おじさんは水着越しにおしりを撫でながら、余韻にひたることにする。

「うぅ……せ、センパイ……こんな、ひどい……」
二人とも疲れていたようだったので、
たまには会わせてあげることにした。 涙ながらの再会である。
「ほ……ほ○、る……？ ごめん、ね。ほ○る……。
私、先輩で、お姉さんなのに、こんな、なっちゃって」
「センパイ、センパァイ……うぇぇ……」
こ○りちゃんはもう泣きわめく元気もないようだ。
次は泣きじゃくってるほ○るちゃんに、相手してもらおうかな。
「もう、許してください……わたしたち、家に帰りたいです」
そういうわけにはいかないよ。おじさんももう後戻りできないんだ。
こうなったら見つかるまで、君たちと楽しませてもらうつもりだよ。
「そ、そん、な……そんな……」
「……」
本当に、本当に可愛い娘たちだ。
……いつまで、この田舎娘二人と一緒にいられるだろうか。